

第5回二戸市埋蔵文化財センター

発掘調査報告会

◎特別講演

「八戸地方の古代社会」 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 宇部 則保

◎平成27年度調査報告

「下構遺跡」「前小路遺跡」 二戸市教育委員会文化財課 薦川 貴祥
「史跡九戸城跡」 二戸市教育委員会文化財課 鈴木 裕一郎

平成28年2月21日（日） 午後1時 会場/二戸市埋蔵文化財センター会議室

後援：八戸市教育委員会、一般社団法人岩手県文化財愛護協会、岩手日報社、データー東北新聞社

NHK 盛岡放送局、カシオペアエフエム、九戸城を活かす会、九戸城ボランティアガイドの会

プログラム

13:00	開会
13:00	あいさつ
13:10-14:00	特別講演「八戸地方の古代社会」 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 参事 宇部則保 氏
14:00-14:10	質疑応答
14:15-14:25	平成27年度調査報告 ・下構遺跡 二戸市教育委員会文化財課 蔦川 貴祥
14:25-14:40	休憩
	平成27年度調査報告
14:40-15:15	・前小路遺跡 二戸市教育委員会文化財課 蔦川 貴祥 ・史跡九戸城跡 二戸市教育委員会文化財課 鈴木 裕一郎
15:15-15:30	質疑応答
15:30	閉会
15:30-16:00	ギャラリートーク

特別講演講師紹介

宇部 則保 氏 経歴

1957年 岩手県久慈市生まれ

1979年 東北学院大学卒業

八戸市教育委員会に採用 埋蔵文化財発掘調査等に従事

2011年 八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館に配属

現在 是川縄文館参事 是川遺跡の史跡整備等を担当

調査歴 史跡根城跡、丹後平古墳群、是川遺跡、熊野堂遺跡、酒美平遺跡 など

特別報告

『八戸地方の古代社会』

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館 宇部 則保

1. 飛鳥・奈良時代の馬淵川流域

- ・7世紀頃を境に東北北部の社会は大きく変化。
- ・馬淵川流域の古代集落の発掘調査事例が増加
- ・岩手北部～青森南部(馬淵川、新井田川、奥入瀬川などの流域)に村が増加。
- ・気候の温暖化。農耕生産が高まった。

2. 根城東構地区-低位段丘の集落

- ・河川交通の便、稻作適地。各時代の拠点集落。
- ・7世紀の集落は一辺10mの大きな竪穴を中心に、10棟程度で構成。
- ・土師器に北海道的な特徴や関東など南の特徴もみられる。
- ・北と南との交流。
- ・鎌、斧、鋤、刀子(小刀)、鏃などの鉄器、布の生産の紡錘車等。黒曜石。

3. 田面木平1遺跡-高位段丘の遺跡

- ・標高100mほどの高い段丘面の集落。
- ・竪穴住居が22棟、倉庫とみられる掘立柱建物など
- ・ほとんどの竪穴住居が焼けた状態でみつかった。
- ・生活道具が置き去りにされていることが多い。
- ・大型の竪穴住居は有力者の家。鉄製品、耳飾り、ガラス玉、須恵器などの威信財。
- ・階層分化した社会。

4. 末期古墳の出現

- ・7世紀に出現。鹿島沢古墳 史跡丹後平古墳 史跡阿光坊古墳群
- ・埋葬施設(主体部)は東北北部の独自な構造。東北北部の地域色の強い墓制
- ・丹後平古墳-7世紀後半～9世紀後半。直径7～10mくらいの円墳。
- ・円墳85基 土坑墓7基 地下式横穴墓12基 馬墓2基など
- ・主体部の主な副葬品-①武器主体(蕨手刀・直刀・鉄鏃等)、②装身具(石製・ガラス製玉・錫製鉈など)主体、③武器・装身具両方

- ・周溝の主な供献品-土師器・須恵器、玉類、轡、和同開珎 銙帶金具、獅噏式三累環頭太刀柄頭など
- ・丹後平古墳の埋葬者-中位段丘の酒美平、盲堤沢3、田面木遺跡などの可能性。
- ・末期古墳の周辺は、八戸の村の中心・エミシ集団の拠点。

5. 交易・交流

- ・八戸地方は陸の道 海の道を通じて交流していた太平洋側の窓口のひとつ。
- ▲「続日本紀」靈亀元年(715)十月条

蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以来、貢獻昆布。常採此地、年時不闕。今國府郭下、相去道遠、往還累旬、甚多辛苦。請、於閉村、便建郡家同於百姓、共率親族、永不闕貢。並許之。
- ・8世紀初めの閉村と国府との貢納関係
- ・集落の増加。
- ・太平洋側の末期古墳の造営の最盛期-武器類、装飾品、須恵器などの外来品。活発な交易活動の証。中央とつながる集団
- ・律令国家の政治支配が北へ。
- ・丹後平古墳の銙帶-中央と強く結びついていた人がいた

6. 平安時代の八戸地方

- ・38年戦争(宝亀5年～弘仁2年)-平安時代初めに岩手中部、盛岡までが律令国家
- ・青森県と関係あるエミシの村が日本後紀に登場
- ▲「日本後紀」弘仁二年(811)七月二十九日条、

出羽国奏、邑良志閉村降俘吉弥侯部都留岐申云、己等与式薩体村夷
伊加古等、久構仇怨。今伊加古等、練兵整衆、居都母村。誘弊伊村
夷、將伐己等。伏請兵糧、先登襲撃者....
- ・エミシの村同士の連携・敵対の状況。
- ・都母の本拠地は?
- ・奥入瀬川下流の左岸-8世紀終わりから9世紀初めのエミシ集団の本拠地。

7. 古代の大開発の到来

- ・9世紀後半～10世紀は、古代の大開発の時代。
- ・集落、堅穴住居数の激増。人の往来の拡大。生産活動の活発化。青森県は交易活動の中継地
- ・馬淵川左岸丘陵地の遺跡-7・8世紀の遺跡が少ない→9世紀後半以降、大規模な集落が出現。岩ノ沢平→大仏館→林ノ前・大仏

- ・鉄器生産を行っていた集落。
- ・岩ノ沢平遺跡・9世紀後半に50棟、10世紀前半には100棟前後まで増加。掘立柱建物、鍛冶遺構など。鉄滓、鞴の羽口。

8. 古代社会の変貌

林ノ前遺跡の調査

- ・堀・大溝で囲われた集落の出現(環濠集落、防御性集落などと呼称)。
- ・特定の集落が極端に大規模。
- ・八戸地方最大の集落 200棟を超える堅穴住居や掘立柱建物、土坑、製鉄遺構、堀(大溝)等
- ・集落の様子、活動が平野部側からは見えない立地。
- ・堅穴住居等は斜面を中心に何度も立て替え。非常に密度が濃い。
- ・人骨が10体ほど発見。→戦争と結び付ける根拠?。
- ・馬、牛の繁殖、鉄器、金、銀、銅の貴金属製品も生産。
- ・製品は集落の外へも移出? 交易に便利な場所に立地。
- ・交易→政治権力と関係をもちながらか?
- ・宴会用の土師器の小皿→一定の様式にならった宴会儀式の場。
- ・林ノ前遺跡の時代に交易を通した中央との関係

下構遺跡

所 在 地	二戸市仁左平字下構地内
調 査 原 因	仁左平小学校環境整備工事に伴う調査
調 査 期 間	平成27年6月22日～8月21日
調 査 面 積	計2,200m ²
主 な 時 代	奈良時代、平安時代
主 な 遺 物	土師器、須恵器、土製品、石器、鉄製品

①遺跡の説明

下構遺跡は、標高325mの高森山の山裾にある、二戸で最も高い「仁左平段丘」の上に位置しています。西側に馬淵川を見下ろせる場所であり、川沿いの低位段丘との比高差は約40mです。

遺跡の近隣には、同じ段丘北西裾の戸花遺跡、南東には大下遺跡・大段遺跡があります。戸花遺跡からは奈良時代、大段遺跡からは平安時代の竪穴住居跡が確認されています。おそらく段丘の西側は奈良時代の集落があり、東側は平安時代の集落であったと推定できます。

遺跡のある現仁左平地区は、読みが同じことから、「日本後紀※1」に書かれている爾薩体に比定されています。しかし、かつて伊加古が治めていたこの爾薩体は、現仁左平地区的範囲よりは広く、県北二戸郡から青森県三戸郡にかけての範囲だったと考えられています。

※1…平安時代 792～833年間(桓武天皇～淳和天皇)の国史が記されている歴史書で、六国史の一つに数えられる。

②調査の内容

今回の調査は、仁左平小学校の環境整備工事に伴う調査です。試掘調査の結果、平安時代の竪穴住居跡が確認されたため発掘調査となりました。調査は、重機により表土を剥がし、その後遺構検出面まで人力で掘り下げて行いました。

遺構面までの深さは、地表面から45cmで、旧校舎建設時のカクランが多く見られました。遺構の堆積土には白色火山灰(十和田a降下火山灰)がブロック状に混じっており、遺構の時期を決定する手掛かりになりました。



SI3 堆積状況

③調査の結果

今回の調査の結果として、5棟の竪穴住居跡、竪穴遺溝3棟、焼土を伴う不明遺構2基、小穴30個が検出されました。

遺物は土師器、須恵器、鉄製品等古代の遺物が主体であり、その他縄文土器、石器、土製品が出土しています。

竪穴住居跡は、最も小さいSI2が2m四方で、最も大型のSI6で7.5m四方でした。白色火山灰（十和田a降下火山灰）の堆積状況及び出土土器の特徴から9世紀～10世紀を主体とした集落跡であることが判明しました。この集落跡は、日本後紀に出てくる8～9世紀の伊加古を長とする爾薩体よりも時代が新しいと考えられます。

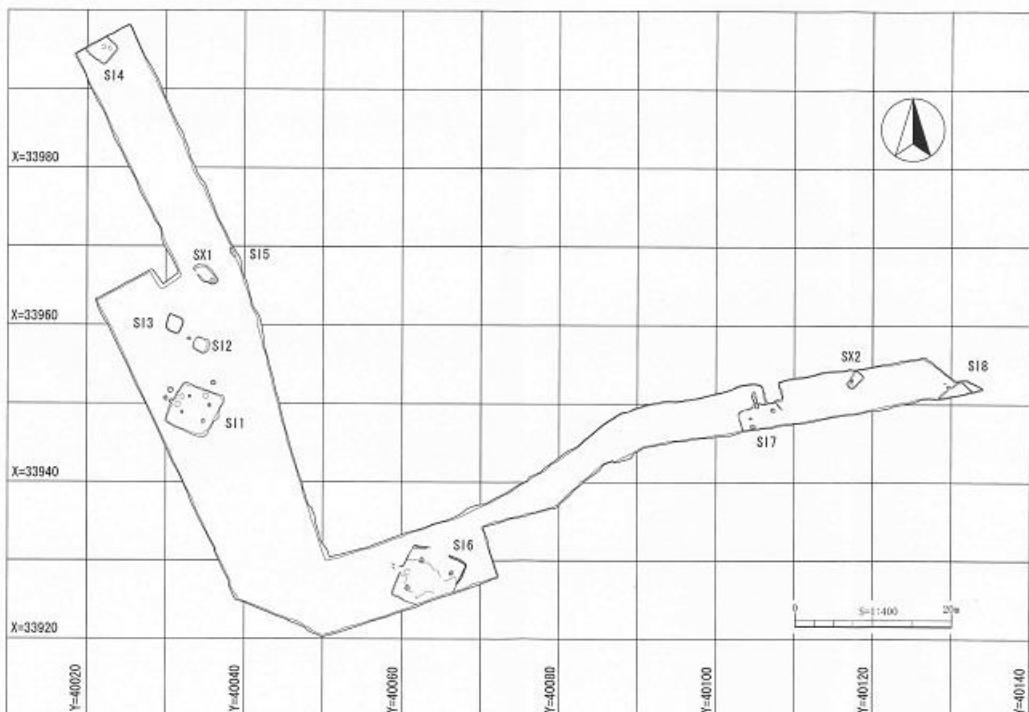
より爾薩体の時期に近いのは、現戸花団地付近にある戸花遺跡の集落跡です。これまでの調査では、奈良時代の焼失家屋が2棟確認されています。
(鳶川 貴祥)



調査区全景（北側）



調査区全景（南側）



下構遺跡遺構配置図 (1/1,000)

前小路遺跡 第38～43次調査

所 在 地	二戸市石切所字前小路地内
調 査 原 因	新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業
調 査 期 間	平成27年4月21日～12月15日
調 査 面 積	計3,040.7m ² （内訳は表を参照）
主 な 時 代	奈良時代、平安時代、近世
主 な 遺 物	土師器、須恵器、土製品、石器（すりいし　たたきいし　磨石、敲石等）、鉄製品

平成27年度前小路遺跡調査別遺構数内訳表

調査次名	面積 (m ²)	堅穴 住居跡	堅穴 遺構	土坑	井戸	溝	近世墓	不明 遺構
第38次調査	131.8	1		3		3		2
第39次調査	392.4	1	1	11	4		7	
第40次調査	717.3	5	11	8		3	2	1
第41次調査	824.0	16	1	6		5		
第42次調査	705.4				4		2	
第43次調査	269.8	6		1				
合計	3,040.7	29	13	29	8	11	11	3

①遺跡の説明

前小路遺跡は、朝日山の麓から馬淵川の河岸段丘上に広がる平安時代（9世紀～10世紀）の集落跡です。平成12年に新規遺跡に登録され、それ以降、新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業の進捗と共に調査が進められてきました。これまでの調査で確認された遺構は、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、円形周溝、鍛冶遺構など様々で、中でも堅穴住居跡は100棟以上確認されており、大きな集落であったことが窺えます。また、馬淵川へと繋がる溝が集落内を周っており、集落の区画や排水施設として用いられたことがわかります。溝の幅は約3mで、深さは70～80cmで、水性堆積の跡が見られます。

遺物としては、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、鉄器、動物骨などが見られます。特に堅穴住居跡からは久慈産と思われる琥珀玉が出土しており、また、塩作りの土器も出土していることから沿岸の集落との交流があったことが示唆されます。

②調査の内容

前小路遺跡の調査は、新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業に伴う事前調査です。宅地造成、道路工事等に先立って発掘調査を行ない記録・保存をおこないました。

調査は、重機により表土を剥がし、遺構のある面まで掘り下げます。遺構面からは、移植ベラや鋤簾などを用いて人力で表面を綺麗にして、遺構を見つけます。場所によって異なりますが、これまでの調査から、現在の地表面より概ね深いところで80cm～1m、浅いところで30cm～40cm下げるとき、遺構面が確認できます。

遺構は、土に埋まる過程を確認するため、堆積土観察用のベルトを残して調査します。

遺構の時期を知る指標として、堆積土に含まれる火山灰の降下年代や、遺構の出土遺物の帰属年代などを使います。

今年度の調査では、昨年度に引き続き、市道大村線の宅地部分（第38・39・41・42次）と、東側の宅地部分と道路部分（第40・43次）を調査しました。その結果、多数の竪穴住居跡を中心に、平安時代の溝、土坑など、前小路集落の特徴をあらわす貴重な成果が得られました。

③調査の結果

今回の調査の結果として、29棟の竪穴住居跡、溝11条、土坑29基が検出されました。中でも第40次調査で検出された平安時代の溝は、幅約3m、深さ70～80cmと大きく、南から北東の馬淵川に向かって回るように延びています。昨年度の調査で出た溝の続きで、今年度の調査で北にさらに真っ直ぐ延びることがわかりました。

その他、今回の調査では、これまでの前小路遺跡の調査の中で最も大きい竪穴住居跡（SI05写真）が確認されています。一辺が約12mの方形で、カマドも住居の大きさに合わせて最大のものが確認されており、長径が煙道まで含めて4.3mもあります。また、この住居にはカマドが3つあり、3回カマドを作り替えていました。

遺物には土器類の他に鉄製品が多く、完形の鋤先や、刀子など全59点が出土しています。羽口や鉄滓も出土していることから小鍛冶も行っていた可能性があります。これまでの調査で、鍛冶関連遺構はすべて竪穴住居内から確認されています。（薦川 貴祥）



第40次調査 SI05 カマド完掘



第40次調査 SI05 完掘



第40次調査 SI05 出土鋤先

史跡九戸城跡

所 在 地	二戸市福岡字城ノ内
調 査 原 因	環境整備事業に伴う内容確認調査
調 査 期 間	平成27年7月21日～10月30日
調 査 面 積	312 m ²
主 な 時 代	中世、近世
主 な 遺 物	陶磁器（瀬戸美濃・青花）、銭貨、鉄製品、縄文土器、石器

①遺跡の説明

史跡九戸城跡は、市街地のほぼ中央の河岸段丘上に位置しています。西は馬淵川、北は白鳥川、東は猫渕川と三方に川が面しており、それぞれ、九戸城の外堀となっています。城は本丸・二ノ丸・若狭館・石澤館・松ノ丸・三ノ丸の曲輪と、武家屋敷跡である在府小路遺跡とで構成されています。

天正19年（1591）の豊臣軍による奥州再仕置により九戸城は落城しました。その後、豊臣秀吉の命を受けた蒲生氏郷によって本丸・二ノ丸・松ノ丸を近世城郭に改修しましたが、若狭館・石澤館は中世城郭のままで考えられています。

平成元年（1989）より継続して本丸と二ノ丸東側の発掘調査を進めており、本丸では礎石建物跡を含む掘立柱建物跡が確認されていますが、遺構数はあまり多くありません。二ノ丸東側では掘立柱建物跡や竪穴遺構、堀跡、門跡、柵跡が確認されています。



調査状況

②調査の内容

今年度の調査は平成28年度にエントランス広場整備予定地である法務局跡地の重要遺構の有無と旧地形の解明を目的として調査が行われました。

トレンチ（試掘溝）を設定した上で、重機で表土・碎石を掘削し、人力で検出作業を行いました。



T4 検出状況

③調査の結果

対象地西側の平場部分には、東西方向に4本、南北方向に1本のトレンチを設定して検出作業を進めました。その結果、建物が建っていた東側は後世の造成や攪乱によって削平されており、城郭期の遺構は確認されませんでした。西側は削平が少なく地山が残っていたもの的小穴がいくつか確認される程度で、遺構はほとんど見られませんでした。

対象地東側の土壘部分は傾斜地の自然地形を切土し、盛土して土壘を造ったことが分かりました。土壘上部には白色火山灰が堆積していましたが、白色火山灰下よりゴミが確認されたことから、土壘の一部は削平されており、当時の土壘はもっと高かったと思われます。法面下では表土直下に白色火山灰層があり、さらにその下から再度白色火山灰層が確認されました。周囲は自然崩落などにより何回か堆積していると思われます。ただし、どの時代の堆積かはわかりませんでした。

また、傾斜途中の平場部分にトレンチを設定して掘削したところ、自然流路が確認されており、縄文土器が数多く確認されましたが、縄文時代の遺構は確認されませんでした。

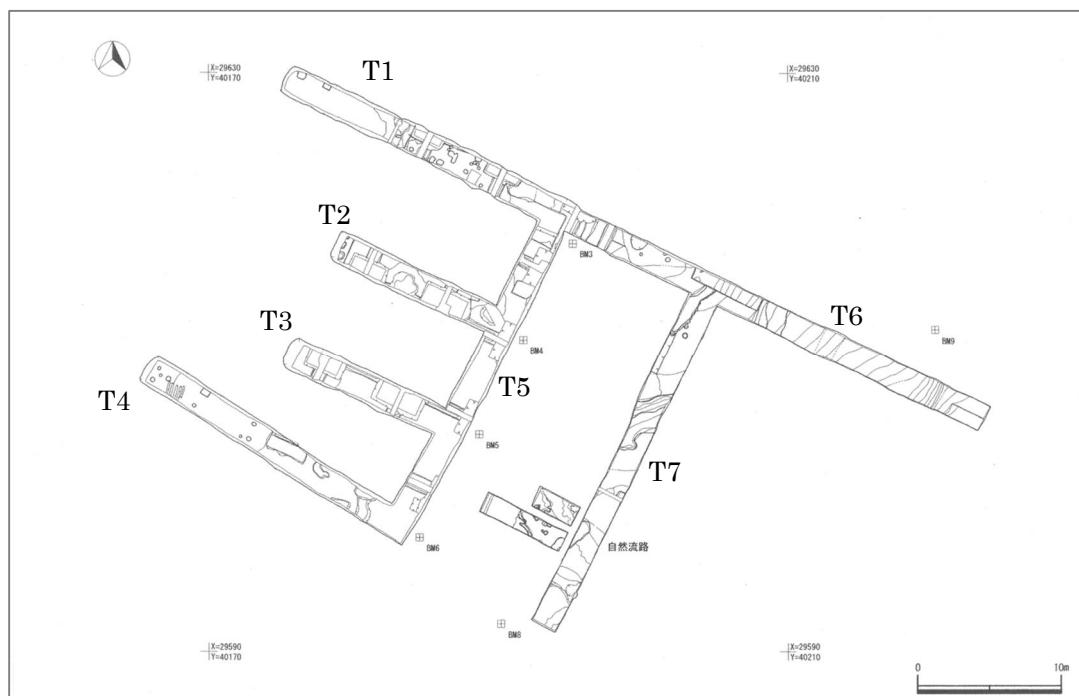
(鈴木 裕一郎)



調査区全景（北西から）



調査区全景（東から）



九戸城跡遺構配置図(1/500)

在府小路遺跡 第28~33次調査

所 在 地	二戸市福岡字在府小路地内	
調 査 原 因	個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査	
第28次	期 間	平成27年4月20日~5月18日
	面 積	269 m ²
第29次	期 間	平成27年4月20日~5月14日
	面 積	281 m ²
第30次	期 間	平成27年4月20日~5月15日
	面 積	536 m ²
第31次	期 間	平成27年5月14日~6月10日
	面 積	270 m ²
第32次	期 間	平成27年6月10日~8月24日
	面 積	266 m ²
主 な 時 代	縄文、中世、近世	
主 な 遺 物	縄文土器、陶磁器、銭貨、金属製品	
第33次	調査原因	道路建設工事に伴う緊急発掘調査
	調査期間	平成27年7月21日~11月5日
	調査面積	552 m ²
	主な時代	中世、近世
	主な遺物	陶磁器、金属製品、縄文土器

①遺跡の説明

在府小路遺跡は九戸城跡の南側に位置しており、二ノ丸、松ノ丸と堀跡で接しています。天正19年（1591）の豊臣軍による奥州再仕置により九戸城は落城し、その後豊臣秀吉の命を受けた蒲生氏郷によって改修された際の武家屋敷跡と考えられています。今までに掘立柱建物跡や石積みの道路側溝跡、井戸跡などが確認されています。

②調査の 内容・結果

第28次~32次調査

調査区は昨年度調査した第27次調査の隣接地のため、縄文時代の遺物、中世・近世の遺構・遺物が確認されることを想定しました。重機によって表土剥ぎを行い、その後検出、掘削作業を行いました。

遺構は竪穴住居跡5棟、掘立柱建物跡4棟、土坑5基、井戸跡3基、集石遺構2基、焼土遺構2基、不明遺構2基、小穴400個以上を確認しました。竪穴遺構のうち、第28次調査で確認された2基は壁際に柱穴がめぐり、中世・近世の竪穴遺構と考えられます。他の遺構も同時期の

想定ができますが、第31次調査の土坑1基は縄文時代の貯蔵穴で、他の遺構の中には近現代の遺構もあると思われます。

遺物は縄文土器、瀬戸（折縁皿・丸皿）、錢貨、縄文土器等が出土しています。

第33次調査

路盤を重機で掘削した後に、人力で検出作業を行いました。なお、工事と並行しての調査だったため、毎日調査終了後、埋戻し、次の地点へ進んでいく方法で調査を行いました。

遺構は時期不明の土坑・小穴が少数見つかるのみでしたが、調査区の北東端において、溝跡が確認されました。片側の壁面には川原石を一段並べており、底面近くの堆積土には砂が多く含まれ、硬くしまっていました。水路として利用されていたと考えられ、近世の溝と思われます。

遺物は、陶磁器（瀬戸菊皿、青磁）、縄文土器が少数出土しています。

（鈴木 裕一郎）



第31次調査区全景



第32次調査風景



第33次調査溝跡全景



第33次調査風景

天台寺跡

所 在 地	二戸市淨法寺町御山久保地内
調 査 原 因	保存修理事業に係る内容確認調査
調 査 期 間	平成27年4月28日～9月30日
調 査 面 積	約50m ²
主 な 時 代	中世、近世
主 な 遺 物	銭貨、金属製品、土師器

①遺跡の説明

天台寺は奈良時代の神亀5年（728）聖武天皇の命を受けた行基が開山したと伝えられており、寺宝や仏像から平安時代末期には成立していたようです。現在ある本堂・仁王門などの建物は万治元年（1658）に南部重直公によって再建された以降のものです。

昭和53年から平成元年にかけて旧淨法寺町教育委員会が中心になって発掘調査が行われ、平安時代から中世に想定される建物跡が見つかっていますが、古代から中世にかけて天台寺が継続していた考古学的証拠は発見されませんでした。

②調査の 内容・結果

本年度は、本堂礎石・縁廻り・向拝、仁王門の調査を行いました。

本堂は修復工事に伴い、礎石の据え直しが必要な7石を撤去し、掘削深度まで下げながら、堆積土・遺構の確認をしました。縁廻り・向拝はコンクリート混じりの礫を撤去し、調査をして、仁王門はコンクリートたたきの下に敷かれていた礫を一部除去し、検出作業を行いました。

本堂礎石

礎石部分を精査したところ礎石を押えるために玉石が敷き詰められており、掘削を進めた結果、3つに分けられる基壇面（造成面）を確認しました。上層からは永楽通寶・寛永通寶などの銭貨が多く出土しましたが、基壇下層は永楽通寶が主のため、時期差が考えられます。

基壇面下の地山を精査したところ、柱穴18個と土坑2基が確認されました。柱穴は一部柱痕（柱の痕跡）をもって整列するものがあり、現在の本堂以前に何らかの建物が建っていたことが言えますが、以前の天台寺の



調査状況

建物とは断定できませんでした。

向拝

コンクリートの覆いを取ったところ、表土下より地覆石と思われる石が並んでいましたが、堆積土から明治以降に置かれた可能性が高いといえます。なお、西側の礎石を外して検出したところ縁廻りの束石同様、玉石が確認され、本堂建立当時の原位置を保っていると考えられます。

縁廻り

北側・東側・西側の3箇所を掘削しました。束石の下からは拳大の玉石が見つかり、さらにその下は基壇面と思われる黒色土が検出されました。その周りを円形に土を残し、礫で覆っていることから、その後の改修の際に束石部分を残して、周りを掘削した上で、束石の補強のため礫を入れて、その後表面をコンクリートで固めたと思われます。

仁王門

玉石を除去したところ、地山と思われる黒色土が検出されたが、柱穴や掘削、造成の跡などは見つからなかったため、地山の上に礎石を設置し、その上に仁王門を建設したと思われます。

出土遺物

今回の調査では銭貨（寛永通寶・永樂通寶・北宋錢）、金属製品（鉄釘・銅製品）、土師器などがテンバコ4箱出土しました。特に銭貨は出土が多く、厨子下周辺からは多くの銭貨が出土し、その中から金箔押の銭貨が2点出土しました。また、土師器は基壇面下より出土しています。

(鈴木 裕一郎)



向拝検出状況



束石下玉石検出状況



仁王門検出状況



礎石下柱穴全景

晴山遺跡（上里遺跡群） 第35次調査

所 在 地	二戸市石切所字晴山地内
調 査 原 因	新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業
調 査 期 間	平成27年5月1日～6月30日
調 査 面 積	842.1 m ²
主 な 時 代	縄文時代、近世
主 な 遺 物	縄文土器、陶磁器

①遺跡の説明

晴山遺跡は上里遺跡群の一部で、市内を北流する馬淵川が大きく蛇行する地点の北岸、西側には名勝の男神岩、女神岩を望む河岸段丘上に位置しています。これまでの調査では、縄文時代から古代、中近世まで幅広く出土しており、最も古いものは縄文時代中期末の大木10式並行期の複式炉を伴う堅穴住居跡で、床面から石皿が出土しています。

また新しいものでは13世紀の白磁を伴う堀が確認されています。しかし、どの時代の建物も大きなムラを形成するほどの数は確認されておらず、細々と長い期間この地に暮らしていた様子が窺えます。

②調査の 内容・結果

晴山遺跡の調査は、新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業に伴う事前調査です。

今年度の調査では、掘立柱建物跡1棟、溝5条、縄文時代の晩期の遺物包含層2箇所が確認されました。

掘立柱建物跡は梁行3.3間×桁行5.5間の柱間寸法8尺です。柱穴の径は約70cmで、底面の柱痕部分が硬化しています。近世のものと推測できます。

溝は、馬淵川へ向かって流れる細い溝と、それと垂直に交わるように伸びる太い溝の2種類があります。

(葛川 貴祥)



調査区全景（東から）



掘立柱建物跡

三ノ丸遺跡 第4次調査

所 在 地	二戸市福岡字橋場、五日町地内
調 査 原 因	個人住宅新築工事に伴う緊急発掘調査
調 査 期 間	平成27年10月8日～28日
調 査 面 積	201 m ²
主 な 時 代	縄文時代、近世
主 な 遺 物	縄文土器、陶磁器、金属製品

①遺跡の説明

三ノ丸は史跡九戸城跡の曲輪（城の区域の1単位）の一つで、福岡城期の城下町と考えられています。昭和10年に九戸城が史跡指定された際、すでに市街地化されていたため、史跡外となっています。

昭和57年に調査区西側の調査の際に、土壘とともに、土壘下の版築より天目茶碗が確認されています。

②調査の 内容・結果

今回の対象地の東側には旧奥州街道と旧鹿角街道との追分石があります。寛文7年（1667）の古図によると、東から西にかけて松ノ丸の堀とともに、街道上に木橋が架けられていたことが描かれており、堀が確認されることが想定されました。

調査の結果、遺構は堀跡・掘立柱建物跡・竪穴遺構が確認されました。堀跡は深さ1.8mであり、底面の壁近くには、複数の柱穴跡が確認されたことから、土留めのために柱や塀などを設置していたと思われます。上層の堆積土は表土近くより一気に堆積しており、近代以降の造成と思われます。一方、下層の堆積土は自然堆積と考えられ、それ以前の堆積と思われます。以上のことから堀があった場所を、近代以降に掘削して造成したと思われます。なお、掘立柱建物跡・竪穴住居跡とも近代以降の建物跡と考えられます。

遺物は、縄文時代晚期の縄文土器とともに、近世末以降の陶磁器などが見つかっています。

（鈴木 裕一郎）



調査区全景（西から）

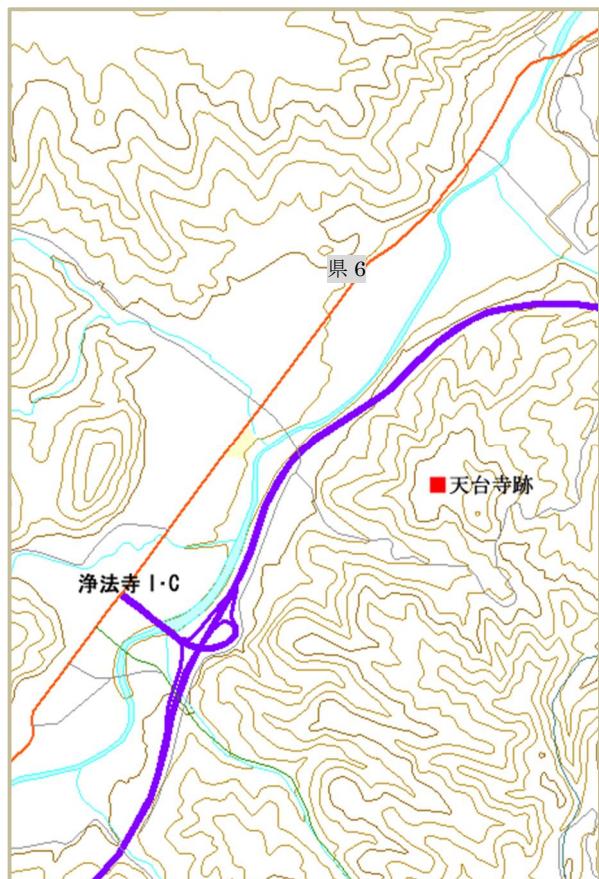
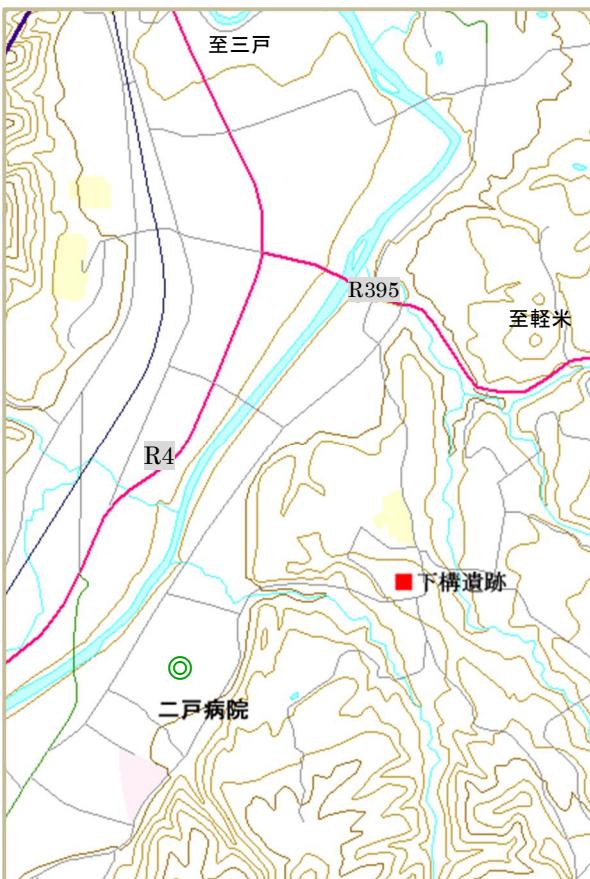


調査区全景（東から）

平成27年度調査遺跡一覧

遺跡名	時代	所在地	調査期間	面積	担当
在府小路遺跡 第28~33次調査	縄文 中世 近世	福岡 字在府小路	28次:4月20日~5月18日 29次:4月20日~5月14日 30次:4月20日~5月15日 31次:5月14日~6月10日 32次:6月10日~8月24日 33次:7月21日~11月5日	269 m ² 281 m ² 536 m ² 270 m ² 266 m ² 552 m ²	横井 鈴木
前小路遺跡 第38~43次調査	奈良 平安 近世	石切所 字前小路	4月21日~12月15日	3040.7 m ²	薦川
天台寺跡	中世 近世	浄法寺町 御山久保	4月28日~9月30日	50 m ²	柴田 鈴木
晴山遺跡 (上里遺跡群) 第35次調査	縄文 近世	石切所 字晴山	5月1日~6月30日	842.1 m ²	薦川
下構遺跡	縄文 奈良 平安	仁左平 字下構	6月22日~8月21日	2,200 m ²	横井
九戸城跡	中世 近世	福岡 字城ノ内	7月21日~10月30日	312 m ²	柴田 鈴木
三ノ丸遺跡 第4次調査	縄文 近世	福岡 字橋場 五日町	10月8日~10月28日	203 m ²	鈴木

調査遺跡所在地図



語句説明

■ 遺構	いこう 豹穴住居など地上に残された生活の痕跡のこと（不動産）
■ 遺物	いぶつ 土器、石器などの生活道具のこと（動産）
■ 豆穴住居	たてあなじゅうきょ 縄文時代から古代に見られる地面をほり窪めて床とした住居のこと
■ 掘立柱建物	ほったてばしらたてもの 地面に穴を掘り、礎石を用いずに柱を建てた建物のこと
■ 土坑	どこう 貯蔵などに用いられた様々な形の穴のこと
■ 土師器	はじき 古代に使用された素焼きの土器
■ 須恵器	すえき 窯を用いて高温で焼かれた硬質の土器
■ 攪乱	かくらん 遺構などが、新しい時代の耕作などによってかき回されてしまっている状態
■ 地山	じやま 自然のままの土、地盤のこと
■ 検出	けんしゆつ 土をきれいにして遺構の土を見やすくする作業のこと
■ 向拝	ごはい 社殿や仏堂で、屋根を正面の階段上に張り出した部分 参拝者の礼拝する所